

# 日本語学習者の誤用分析

## —中国語母語話者の事例研究—

島田 かおり

### はじめに

中上級レベルの中国語母語話者を対象に、誤用分析を行う。張(2001)によると、誤用分析とは、「広く言えば外国語を勉強する者がその外国語を使うときに犯す間違いの原因を分析する学問」のことである。また、誤用(error)とは、『新・はじめての日本語教育—基本用語事典』によると、「第二言語学習者の発話(話したものと書いたもの両方)の中に現れたことばの使い方で、母語話者なら用いないようなもの」のことであり、「話者の疲労や不注意から生じるミステイク(mistake)とは区別すべきもの」とある。さらに誤用は、文構造の主要部において誤用が生じ、発話の理解に支障を来すような場合をグローバルエラー(global error)、逆にその誤用が意味の疎通に支障のないようなものである場合をローカルエラー(local error)と呼び、区別されている(『新・はじめての日本語教育—基本用語事典』より)。誤用分析は、通常グローバルエラーを対象に行われることが多いが、学習者の習得レベルによっては、グローバルエラーを含め、普段見過ごされているローカルエラーについても、完全さに依存したやり取りが可能となるため、誤った使い方をしても日本語母語話者に訂正されることもなく、化石化(fossilization)するケースが多いと考えられる。このような観点から、本稿では、ローカルエラーを含めた誤用を対象とし、その誤用原因を分析していく。

### 1. 研究の目的と意義

筆者は、大学の授業や留学生チューターの活動を通じ、日本語学習者とりわけ在籍者数の多い中国語母語話者と交流する機会に恵まれてきた。それは同時に、彼らに日本文化や日本語を説明する事の難しさを体験する機会であったとも言える。中でも誤用を訂正することは難しい。学習者に聞かれて答えられない場合や、説明する事でかえって学習者を悩ませる場合もあった。また、学習者が自らの誤用に気づき、自己訂正するのも容易ではない。江副(1987)は、学習者が発話を産出する過程について「作文を書くときには、誰でも自分が書く文は正しいと信じて書く。何をもって正しいのかは次の段階での発想だ。さらにまた、作文での間違いは、そのまま話すときに犯す間違いでもある」と述べている。学習者本人が自己訂正することの難しさを窺い知ることが出来るだろう。林(2002)は、誤用を論理療法の考え方に当てはめて「思い込み」と表現し、「学習者の誤用文の原型となる『思い込み』へと遡行することにより日本語教育における誤用分析への応用が考えられる」と述べている。また、木村(2009)も外国人日本語学習者の第二言語習得研究の中で「誤用は価値あるもの」と位置付け、分析、訂正を行っている。

本稿では、中国語母語話者の授業感想カードや日記、ブログなどの記述を談話として扱い、誤用を分析していく。

## 2. 先行研究

木村（2009）は、滞日7年以上の上級学習者（いずれも中国語母語話者）を対象にしたインタビューとブログ（アグネス・チャンの記述）をもとに助詞「に」「で」「を」の誤用について調査している。その中で、滞日年数が長く日本語使用歴の長い外国人は、誤用を訂正される機会を失い、そのまま誤用が化石化してしまっている危険性を指摘している。

三浦（2009）は、中国語母語話者であり、滞日年数が30年以上になるアグネス・チャンのブログ記述を研究対象とし、誤用を品詞別に分類・分析している。特定の語に繰り返し見られる誤用については、化石化（fossilization）の可能性を指摘している。また、アグネス・チャンの日本語が教室学習よりも自然習得に近い環境で身に付いたものだと考えられることから、周囲の日本人の話す日本語や既に持っている外国語の知識が習得に影響している可能性について触れている。

## 3. 研究方法

### 3-1. 調査資料と対象者

本調査で使用した資料は、以下の通りである。

- |  |  |
|--|--|
| <p>① 質問・感想カードの記述</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2008年後期「日本語学特殊講義」</li> <li>・2008年後期「日本語Ⅳ」</li> <li>・2009年前期「日本語Ⅰ」</li> <li>・2009年前期「日本語学講義」</li> </ul> <p>② 短期滞在日本語学習者の日記</p> <p>③ 長期滞在日本語学習者のブログ</p> | <p>①の「質問・感想カード」とは、参加者がその日の授業に対する質問や意見を記入するカードのことである。本調査では、上述した四つの授業のカードを使用し、複数の中国語母語話者から誤用を採取している。</p> <p>②の「短期滞在日本語学習者の日記」は、初めて日本に来た学習者が滞在当初から記録していた日記である。2008年10月から2009年3月までの5ヶ月間の記述から誤用を採取している。記述は本人の許可を得て使用している。③の「長期滞在日本語学習者のブログ」は、1972年来日し、滞日年数が30年以上になるアグネス・チャンのものである。本調査では、2007年7月から2008年6月までの1年間の記述から誤用を採取している。（詳細なプロフィールは3-2を参照）</p> |
|--|--|

①の「質問・感想カード」とは、参加者がその日の授業に対する質問や意見を記入するカードのことである。本調査では、上述した四つの授業のカードを使用し、複数の中国語母語話者から誤用を採取している。

②の「短期滞在日本語学習者の日記」は、初めて日本に来た学習者が滞在当初から記録していた日記である。2008年10月から2009年3月までの5ヶ月間の記述から誤用を採取している。記述は本人の許可を得て使用している。③の「長期滞在日本語学習者のブログ」は、1972年来日し、滞日年数が30年以上になるアグネス・チャンのものである。本調査では、2007年7月から2008年6月までの1年間の記述から誤用を採取している。（詳細なプロフィールは3-2を参照）

### 3-2. アグネス・チャンについて

アグネス・チャンのオフィシャルサイトによると次のようなプロフィールとなっている。1955年香港生まれ。2009年現在54歳。1972年来日し、「ひなげしの花」で歌手としてデビュー。現在は、芸能活動ばかりでなく、エッセイスト、目白大学教授（客員）、日本ユニセフ大使など、知性派タレント、文化人として世界を舞台に幅広く活躍している。教育学博士号も取得しており、上智大学国際学部を経て、カナダトロント大学（社会児童心理学）に2年間、アメリカス

ダンフォード大学教育学部博士課程に2年間の留学経験がある。それらの留学期間を除いても滞日30年以上になる。

### 3-3. 分析方法

表3-1. 対象者の表示 (滞日年数は、2009年10月現在)

	性別	来日 (滞日年数)	学習歴
A	女	2008年10月 (1年)	11年
B	女	2009年4月 (6ヶ月未満)	6年
C	男	2008年10月 (1年)	5年
D	女	2008年10月 (1年)	5年
E	男	2008年10月 (1年)	5年
F	女	2008年10月～2009年8月 (10ヶ月)	3年
G	女	2009年4月 (6ヶ月未満)	3年
H	女	2009年4月 (6ヶ月未満)	3年
I	女	2009年4月 (6ヶ月未満)	3年
J	女	2009年4月 (6ヶ月未満)	3年
K	女	2008年10月～2009年8月 (10ヶ月)	3年
L	女	2007年10月 (2年6ヶ月)	2年
M	女	2007年9月 (2年)	2年

誤用は、品詞別に分類し項目ごとに分析してゆく。今回の調査では、助詞、動詞、形容詞、名詞の誤用分析を行ったが、紙幅の都合上、本稿では助詞、形容詞を取り上げている。誤用箇所は、太字と波線で示し、その他の問題点については波線のみで示している。誤用例は、対象者の誤用傾向や特徴を検討するため、プライバシーを保護しながら個人を識別できるよう、アルファベットで記号化している。以下の表3-1は、対象者の内訳である。表3-1の来日年月にある「2008年10月～2009年8月」の記載は、交換留学生で、表を作成した時点で既に帰国していた対象者である。なお、アグネス・チャンの誤用例については、カタカナの「ア」を用いて記号化し、ブログの掲載日時を明記することになっている。また、分析に際して、一つの項目で同じ対象者の誤用例を複数使用する場合、[対象者記号-項目番号-連番]のように示す。非文の記述には、「\* (アスタリスク)」を付している。

## 4. 助詞の誤用例と誤用分析

### 4-1. 「に」にすべきところを「を」にした誤用例

- |                                     |
|-------------------------------------|
| C-4-1-1: 今年は留学生試験を合格だ。必ず合格します。      |
| E-4-1-1: 今年の抱負は日本留学試験を合格したいです。      |
| D-4-1-2: 私の抱負は目の前に日本語留学試験を合格することです。 |

「合格する」は、「山口大学に合格する」「国家試験に合格する」のように「に」を取る自動

詞なので、「を」を取ることは無いと言える。「試験を合格する」の形の誤用は、複数の学習者でみられた。「合格する」と「に」がセットで習得されていないため、「試験+を」の形で名詞と結びつけて一語化してしまっていると考えられる。

また、E-4-1-1は「今年の抱負は」で始まる名詞文だが、文末が動詞文「合格したいです」で終わってしまっている。「今年の抱負は日本留学試験に合格することです」あるいは「今年は日本留学試験に合格したいです」のようにする。D-4-1-2「目の前に」は、「目の前の日本留学試験」のように訂正されるべきである。「～の前に」で、一語化して記憶されている可能性があると考えられる。C-4-1-1「留学生試験」とD-4-1-2「日本語留学試験」は、正しくは「日本留学試験」である。

ア-4-1-1: 明日は協平の先生を会いに行きます。(2007.12.11)

ア-4-1-4: J8サミットを参加しに行きます。(2008.6.24)

ア-4-1-5: 和平方が小さい時、良くバスを乗って、藤沢の湘南台公園へ遊びに行きました。  
(2007.2.10)

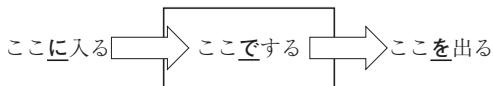
ア-4-1-1は、「先生に会いに行きます」にすべきところを「先生を会いに行きます」としてしまっている。「会う」は、自動詞なので助詞に「を」を取ることは無い。

ア-4-1-4は、「J8サミットに参加しに行きます」とすべきところを「J8サミットを参加しに行きます」としてしまっている。「J8」とは、2008年6月に開かれた洞爺湖サミット(G8)の際にユニセフと外務省が取り組んだイベントで、G8の首脳会談と同時に18カ国から子ども達が集い、「Junior8」と題して意見交換し、議論した会議のことである。誤用は、ア-4-1-1でも「～を会いに行く」の誤用が見られ、「～しに行く」の形で起こっていることから、「図書館に本を借りに行く」「銀行にお金を下ろしに行く」のように「～を～しに行く」の文型に当てはめてしまっている可能性がある。

ア-4-1-5の「乗る」は、乗り物を「場所化」して「に」にする必要がある。アグネス・チャンの「乗る」に関する誤用は、三浦(2009)でも5-1-2「Helicopterを乗るのですよ(2006.8.19)」が報告されている。学習歴の長さを考慮すると、化石化していると考えられる。

今回調査した助詞の誤用で、最も多かったのがこの項目である。中でも、「会う」「参加する」「乗る」など「に」を取る自動詞の間違いが多く見られた。これらの動詞は、使用頻度も高く、初級で取り上げられるものであることから、助詞と動詞が別々に機能するものとして習得されてきた可能性がある。「に」と「を」の誤用は、言い換えれば自動詞と他動詞の問題であり、自動詞と他動詞の使い分けに伴う助詞選択が曖昧なままになっているために起こしているとも言える。

しかし、実際に言語使用の段階で重要になるのは、助詞と動詞がセットで習得されているかどうかであろう。江副(1987)は、助詞を「接着剤」と説明し、動詞を覚える際に必ずセットにして覚えることを提案している。中でも「場所」を表す「に」「で」「を」について図式化し、一連の動作としての習得を提唱している。



イベントに参加する→イベントで議論する→イベントを終了する  
 バスに乗る → バスの中で歌う → バスを降りる

図4-1. 「に」と「で」と「を」

「に」は、場所または場所化したものである「場所」の中に入る「に」であり、「で」は「(場所)に」の「場所」で行う行為、「を」は「場所」を離れる行為であると述べ、図4-1のように図式化している。例えば、図4-1の四角を「大学」だと捉えた場合、「大学に入る(入学する)→大学で勉強する→大学を出る(卒業する)」のように、三つの助詞と動詞の動作性を一まとまりで習得させると言うことである。それにより、学習者が一連の動作の全体像を捉えることが出来るため、誤用を防ぐ手立てになると考えられる。

#### 4-2. 「に」にすべきところを「で」にした誤用例

ア-4-2-1: 特番で、私がどこかで泊めさせてもらいます。ドキドキですね。(2007.8.21)

ア-4-2-2: 昨日は福井で泊まりました。(2007.10.20)

ア-4-2-1、ア-4-2-2の「泊まる」は、「ホテルに泊まる」「京都で観光して、大阪に泊まる」のように「に」を取る自動詞なので「で」ではなく「に」にする。アグネス・チャンの「泊まる」に関する誤用例は、三浦(2009)でも5-5-1「ホテルで泊まりました(2006.7.14)」が報告されている。また、一貫して用いていることから、「(場所)で泊まる」の形で化石化してしまっていると言える。

導入語	導入される動詞
に	状態 (being) いる、ある、泊まる、住む 入学する、参加する、勤める
で	具体的動作 (action) 遊ぶ、働く、ある(=行われる)

場所 (place) → に

場所 (place) → で

図4-2. 場所を表す「に」と「で」

以上、「に」と「で」の誤用を見てきたが、ここで問題となるのは、「に」と「で」の動作の機能である。この違いをまとめると、次のように表すことが出来る(図4-2)。

助詞を動詞の「導入語」と考えた場合、導入語「に」によって導入される動詞は、「いる、ある、住む、泊まる」など「状態」を表すものである。一方、導入語「で」によって導入される動詞には、「遊ぶ、働く、勉強する」など「具体的動作」を表すものである。

#### 5. 形容詞の誤用例と誤用分析(許容の検討も含む)

日本語教育では、一部の例外を除き、「大きい」「高い」「面白い」など終止形が「い」で終わる語をイ形容詞、「元気」「ひま」「勝手」など名詞に修飾する場合、連体形に「～な」をとる語をナ形容詞としている。ナ形容詞は、国文法で言う形容動詞のことである。形容動詞とは、古語で動詞の性質を持っていた「明らかなり」や「堂々たり」が形容動詞と名づけられ、その

まま口語になったことを受け継いだ呼称である。しかし、現在では動詞の性質はほとんど失われており、呼称だけがそのまま残っていると言える。そのため、日本語教育では、一般的にイ形容詞とナ形容詞と言う呼称が用いられているのだが、特にナ形容詞については、他にも「ナ名詞」や「ナ・ニ名詞」、「形容詞的名詞」などの呼称が使われている。それは、活用の点から見ると、「元気、ひま」などの語は、形容詞よりも名詞との類似点が多いためである。次の表5-1は、イ形容詞とナ形容詞、名詞の活用を示したものである。

表5-1. 形容詞と名詞の普通形の活用

	イ形容詞	ナ形容詞	名詞
非過去	やさしい	元気だ	本だ
非過去／否定	やさしくない	元気じゃない	本じゃない
過去	やさしかった	元気だった	本だった
過去／否定	やさしくなかった	元気じゃなかった	本じゃなかった
名詞修飾	やさしい母	元気な母	本の表紙

表5-1に示すように、イ形容詞の語末が活用変化するのに対し、ナ形容詞と名詞に違いは全く見られない。そのため、ナ形容詞か名詞かを判断する一つの目安となるのが、名詞を修飾する際の連体形として「な」をとるか「の」をとるかの区別だと言える。

以上が、日本語教育における品詞と活用の基本的な区分である。この区分に従えば、ナ形容詞と名詞は、はっきり区別されるもので、品詞がわかれば「な」と「の」の区別に困ることは無いと考える学習者があるかもしれない。しかし、実際の日本語母語話者の使用には「な」と「の」の間に「ゆれ」があり、辞書によっては品詞の記載をしていない場合や名詞と形容動詞（ナ形容詞）の両方を記載している場合がある。つまり、誤用か正用かという観点では判断し切れない「許容」の範囲を多く含んでいる項目だと言える。

本稿は、誤用分析を目的としている。しかし、現在の日本語の使用状況に注意を払い、最新の日本語事情を捉えておく事は、日本語教育において必要な要素だと考える。従って、本項目では「正用」か「誤用」かという視点だけでなく、「許容」と思われる範囲を含め、検討を進めることにする。

### 5-1. 「の」にすべきところを「な」にしている例

- ア-5-1-1: 観客がとっても近く感じるので、臨場感と緊張感いっぱいな空間でしたよ。(2008.5.13)
- ア-5-1-2: 今日はみなさんからたくさんパワーを頂きましたので、明日も最高な調子でがんばります。(2008.3.17)
- ア-5-1-3: 満席なホールで話ができ、ありがとう!! (2008. 4.16)

ア-5-1-1は「緊張感いっぱいな空間」としている。「いっぱい」は、『日本国語大辞典（以下、『日国』）』では、「名詞」「副詞」とある。学習者向け辞書である『ふりがな和英辞典（以下、『ふ

りがな』)では、「いっぱい」の、full, filled」と「名詞」の形が見られた。一方、『明鏡国語辞典(以下、『明鏡』)』『学研国語大辞典(以下、『学研』)』では、「名詞」「副詞」「形容動詞」と示されており、辞書によって扱い方に違いが見られる。

「いっぱいな+名詞」の組み合わせで用いたアグネス・チャンの誤用は、三浦(2009)で5-2-1「いっぱいな観客(2006.5.13)」、5-2-3「会場いっぱいな方(2006.7.27)」などが確認されており、「完全な化石化の例」として報告されている。これらの誤用では、「いっぱい」が「名詞」と「副詞」を主な用法とする点を重視している。確かに、三浦(2009)の5-2-1「いっぱいな観客」や5-2-3「会場いっぱいな方」は、会場にいる「客の状態」ではなく、客がいる「会場の状態」を表している点からも「な」ではなく「の」にすべき誤用だと考えられる。

改めて、ア-5-1-1「緊張感いっぱいな空間」を見てみる。例文は、辞書の品詞を重視すれば、連体形「の」を伴う「名詞」として「緊張感いっぱいの空間」とするのが良いと言える。しかし、語構成の点から見ると「緊張感いっぱいな空間」は、「空間の状態」を表していると言え、「緊張感がいっぱい漂っているような」の意味で「な」で表すことが「許容」されるものと思われる。

ア-5-1-2は「最高の調子」としている。「最高」に「な」を伴った形は、アグネス・チャンがよく使用するもので、やはり三浦(2009)でも、5-2-4「最高のプレゼント」、5-2-6「最高の誕生日」、5-2-4「最高の力」などが指摘されており、「最高」を用いて修飾する場合には必ず「な」が選択されていることから、化石化してしまっていると言える。「最高」は、『日国』『明鏡』『学研』では、「名詞」「形容動詞」とあるが、いずれも用例は「最高に」の形で提示されている。『ふりがな』では、「最高のhighest, maximum, best」と「名詞」の形で示されている。

羅(2005)は、連体修飾の時に「の」をとる語を「ノ形容詞」と位置付け、「な」あるいは「の」をとる二字漢語50語を対象に、母語話者と中国人日本語学習者(以下学習者)でどのような選択傾向があるのかを調査している。調査対象語は『ふりがな』から選定されている。母語話者の選択傾向について「辞典に『～な』と提示された語では圧倒的に『な』が選択されているのに対し、辞典に『～の』と提示された語は、『の』『な』の選択は多様化を呈している」と述べ、母語話者の連体形の使用に揺れがあることを指摘している。同調査における「最高」の選択傾向でも、母語話者100名中「最高の(5名)」「最高の(80名)」「最高の(両方・15名)」のように、使用が分かれる結果であった。

三浦(2009)は、羅(2005)の調査結果に加え、インターネット検索によって「最高の」と「最高の」の出現頻度を調査している。「最高の(123,000,000件)」が「最高の(9,230,000件)」の13倍多く出現したことから、「最高の」で用いることがより自然な日本語に近いと言う立場を取っている。多くの日本語学習者の最終目標が、自然な日本語でコミュニケーションできるようになることである点を考えると、より広く使用されている用法を重視する考え方が適切だと思われる。しかし、羅(2005)の結果を「許容」の視点を含めて検討すると、「最高の(5名)」と「最高の(両方・15名)」を合わせると20名になり、「最高の」の80名と対比しても1:4の割合を示している。このように考えると、「最高」が「な」を選択できると「許容」している母語話者の比率は5人に1人の割であり、「最高」に「な」を伴った使用は、「許容」の範囲内であると位置づけることが出来る。この結果から、学習者が周囲の母語話者の使用に影響を受けている可能性もあり、アグネス・チャンの周りにも、「最高の」の言い回しを多用する母語話

者がいると思われる。

ア-5-1-3は「満席なホールで話ができ、ありがとう!!」としている。「満席なホールで話ができ、嬉しかったです。ありがとう!!」のように表現しようとして、途中で文章が省略されてしまったものと考えられる。「満席」は、『日国』と『明鏡』では「名詞」と示されており、『学研』では、品詞の記載は無いが、「の」を取る用例が示されている。『ふりがな』では見出し語に無かった。「満席」は、乗り物や劇場などですべての客席がふさがっている状態そのものを表す語なので「満席のようなホール」とは言えないことから、「な」を伴わない名詞と言えるだろう。アグネス・チャンの「満席」の使用は一例のみで、同様の状況を表す際には、三浦（2009）の指摘にもある5-2-1「いっぱいな観客（2006.5.13）」、5-2-3「会場いっぱいな方（2006.7.27）」のように「いっぱい」が用いられている。誤用は、アグネス・チャンが化石化してしまった「いっぱいな+名詞」からの類推によって「満席な+名詞」の形で用いたと考えられる。

## 5-2. 「な」にすべきところを「の」にしている例

C-5-2-1: この前習っていない図と表の表記について、新たな認識に気づきました。

(2009.4.20)

ア-5-2-1: 今日はすき焼きでした。社長が横浜で手ごろの肉をみつけたのです。(2008.2.11)

ア-5-2-2: 両親が香港への貢献が偉大のだけに、若者が両親の足跡を継ぐだけで大変と思います。(2007.7.21)

C-5-2-1は、「新たな認識」とすべきところを「新たな認識」としてしまっている。「新たな」は、先に述べたように、本来「新たなり」の形だったものが連体形「る」を落として「新たな」と使われるようになったものである。『日国』によると、古くは『万葉集』にも用例が見られる形容動詞である。

ア-5-1-1は、「手ごろな肉」とすべきところを「手ごろの肉」としてしまっている。「手頃ろ」は、『明鏡』『学研』では「形容動詞」とあり、『ふりがな』では「手頃～な」とある。一方、『日国』には「名詞」「形容動詞」の両方が挙げられ、「な」と「の」を用いた用例が示されているが、「の」の用例は「手頃の鉄の棒（滑稽本・七偏人（1857-63）五中）」「手頃の者が来ると直ぐ引提へて手紙を書かしたり（思出の記〔1900-01〕徳富蘆花）」など江戸から明治期に見られるものだった。「手頃」の「の」の選択は、以前は存在したが、現在では「な」を取るナ形容詞として定着していると考えられる。従って、「手ごろな肉」が適切と言えるだろう。「手ごろの+（名詞）」の形は、三浦（2009）でも5-2-14「手ごろの値段でやっている（2006. 8.4）」がアグネス・チャンの誤用例として取り上げられている。また、前回確認されてから二年が経っていることを考えると、化石化していると考えられる。

ア-5-1-2は、「偉大な」とすべきところを「偉大の」としてしまっている。「偉大」は、『日国』『学研』では、「形容動詞」とある。『かたかな』では、「偉大～な」と形容動詞の形で記載されていた。『明鏡』では「名詞・形容動詞」とあるが、「な」の用例はあっても、「の」の用例は見られなかった。羅（2005）の調査によると、「偉大」は、母語話者（100名）の「な」選択率が100%と言う結果であったことから、「の」を伴うことはないと言えるだろう。一方、学習者を

対象にした同調査では、「偉大」に伴う「な」の選択率は74%で、多くの学習者がナ形容詞だと認識しているものの「な」と「の」の選択に迷っている様子が窺われた。

以上、「な」と「の」に関する誤用例を見てきた。中国語母語話者に見られる形容詞に「の」を用いてしまう誤用は、中国語の助詞「的」の影響が指摘されている。日本語の連体形「な」と「の」をとる語は、中国語では形容詞の場合が多く、意味機能上の区別が無い。形態上も「な」と「の」の区別が無いため、中国語の助詞「的」が両者の機能を担っている。図5-1は、日中の形容詞の意味機能と形態の特徴をまとめたものである。



図5-1. 形容詞の意味機能と形態の特徴（語彙は羅〔2005〕を参考にしたもの）

図5-1にある中央の語彙は、日本語と中国語で用いられている共通の語彙である。日本語では「な」と「の」の記号によって品詞の意味が弁別されているのに対し、中国語ではこれらの語彙は全て形容詞であり、形態上も「的」一語で表されている。このような日本語と中国語の「微妙な異同」こそ、形容詞を確実に習得する上で大きな壁になっていると言えるだろう。

また、羅（2005）の調査では、日本語母語話者と学習者の「な」と「の」の選択傾向には、共通する点が多いと指摘している。この結果について、羅（2005）は意味論的検討を加え、日本語と中国語に見られる意味分野の共通点が「な」と「の」を選択する際の目安になっていると予測している。意味分野の共通点とは、日本語のナ形容詞には「曖昧」「快適」「貴重」など「感情」・「感覚」や「評価」を表す語が多く、「とても」や「非常に」などの程度副詞をつけて修飾することができるものが多い。また、「の」を伴う名詞には「一流」「永遠」「天然」など「程度の段階を持たない完成した状態」を表すものも多く、程度副詞をつけて修飾することが出来ないものが多いと言った「意味上の区別」が、中国語の場合にも当てはまることを指摘したものである。これらの意味特徴をまとめると、図5-2のように表すことが出来る。

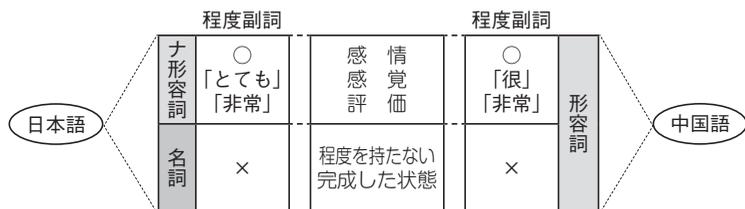


図5-2. 形容詞の意味分野の共通点

この意味特徴の共通点は、中国語母語話者が特に二字漢語の「な」と「の」の選択に迷った

際には、有効な一つの目安になると考えられる。

## 8. まとめと考察

### 8-1. 助詞

本調査で例示したものは、採取した誤用のごく一部であり、さらに細かく見ていけば、その種類や用法はかなりの数になるとと思われる。採取した誤用の中で、その種類が多かったのは、「に」「で」「を」に関する誤用例で、中でも「場所」を表す「に」「で」「を」の誤用が目立った。また、長期滞日日本語学習者のアグネス・チャンの誤用では、三浦（2009）で報告されたものと同様の誤用を採取するなど、改めてその化石化傾向がみられた。助詞の誤用で用いられていた動詞の多くは、日常生活での使用度が高く、初級レベルで学習するものが多かったことから、助詞と動詞を結び付けた習得が進んでおらず、別々のものとして習得してきた結果、助詞選択が曖昧なままになってしまったものと考えられる。

「に」「で」「を」の誤用が多く見られたのは、動詞の性質との結びつきに加え、一つの形態が複数の用法を担っていることが挙げられる。「場所」を表す「に」「で」「を」に関してだが、助詞と動詞を一連の動作の流れとセットで習得することで、誤用を防ぐ手立てを示した。このような助詞の用法の整理は、日本語の習得レベルに応じて行われることが有効だと考えられる。

### 8-2. 形容詞

形容詞の誤用では、連体形「な」と「の」の使い分けに関する誤用が多かった。特に注目したのは、名詞修飾に「の」を取ると考えられる語に「な」を用いた使用例である。名詞と思われる語に「な」を用いた使用には、日本語母語話者の中でも「許容」されるところが多く、今回の調査でも「許容」の範疇にあると判断した内容がある。これは、辞書の記載が必ずしも絶対ではなく、辞書の記載に依存せず、母語話者の言語の使用実態を日本語教育に反映させる上で必要な観点であった。また、羅（2005）の研究から「ナ形容詞の語彙は母語話者ほど明確ではないが、形容詞として認識する傾向が高い」ことが報告されており、意味論的研究から、日本語と中国語に見られる意味分野の共通点が「な」と「の」を選択する際の目安になっていると予測している。この報告を踏まえ、中国語母語話者と日本語母語話者の形容詞の認識には、中国語の「的」と日本語の「な」と「の」の意味機能と形態上の区別が母語干渉になっている一方で、中国語と日本語の形容詞に見られる意味分野の共通点が、ナ形容詞と名詞を区別する有効な手立てとなっていることが明らかになった。

## 9. 今後の課題

本稿では、助詞、形容詞の誤用を取り上げたが、他にも様々な誤用が見られた。今後の課題としては、副詞や語彙、表現などを対象に分析を行いたい。

**【参考文献】**

- 江副隆秀（1985）『日本語を外国人に教える日本人の本』創拓社
- 江副隆秀（1987）『外国人に日本語を教える日本語文法入門』創拓社
- 木村直美（2009）「第4章 長期滞日中国人に見られる助詞『に』『で』『を』の誤用分析—インタビューとブログからの談話分析—」『山口大学日本語教育論集』山口大学日本語教育研究会
- 張 麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク
- 林伸一（2002）「思い込み文への遡行とストラテジー研究～論理療法と日本語教育の接点～」山口大学人文学部国語国文学会『山口国文』第25号
- 三浦恵美子（2009）「中国語母語話者における誤用の化石化と誤用分析～アグネス・チャンのブログ分析～」『山口大学日本語教育論集』山口大学日本語教育研究会
- 羅 蓮萍（2005）「『ナ形容詞』と『ノ形容詞』—中国人学習者の選択傾向—」山口大学人文学部国語国文学会『山口国文』第28号
- 小学館（2001）『日本国語大辞典（第二版）』
- 講談社（2005）『ふりがな和英・英和辞典』
- 大修館書店（2002）『明鏡国語辞典』
- 学習研究社（1990）『学研国語大辞典』

**【参考ウェブサイト】**

<http://www.agneschan.gr.jp/diari/index.php>「アグネス・チャン オフィシャルサイト」

（しまだ・かおり）